

## 飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和2年11月25日現在

### 今月の重点活動

#### ■担い手 吉本氏、農事功績者表彰を受章

今年度の大日本農会農事功績者表彰で、飛騨市の吉本一雄氏が緑白綬有功章を受章された。本来ならば秋篠宮殿下の御名により表彰されることをコロナ禍の関係で表彰式が中止となり、11月18日に岐阜県農政部長より伝達を受けた。

吉本氏は、自己の経営安定は勿論、生産組合役員や農協理事、指導農業士等として地域農業振興や担い手育成に貢献された。また、新規トマト農家就農希望者研修施設

（JAひだ飛騨地域トマト研修所）の研修マネージャーとして、4年間で8名の新規就農者を輩出された功績が認められた。今回の受章は、吉本氏の高い知識や技術、日頃のたゆまぬ努力と共に、関係機関との強固な連携が高く評価されたものである。

農業普及課では、今後もトマト研修所の運営支援及び卒業生の営農定着をより一層支援していく。



【緑白綬有功章を受賞された吉本氏】

### 多様な担い手づくり

#### ■担い手 青年等就農計画の作成支援

飛騨地域では、令和3年4月の就農を目指す若者が、JAひだの運営する飛騨地域トマト研修所や先進農家の元で研修を行っている。農業普及課では、現地ほ場における栽培技術の習得等、実践的な研修が一段落する11月から、支援機関（JA、各市村等）と連携し青年等就農計画の作成支援を行っている。

先進農家で研修を行っている研修生の計画作成支援の際は、実現性ある計画となるように指導農家に参加してもらい、栽培に必要な機械・資材等に関する助言や、就農後の地域や生産組織との関わりについての重要性について助言をした。また、指導農家から支援機関に対し、就農後は作成した計画に基づき営農が行われているかの定期的な確認と計画達成に向けた継続的な支援について、意見をいただいた。

農業普及課では、自主性を尊重した就農計画の作成と、就農後計画に基づき早期に栽培技術、経営管理能力を習得できるように継続して支援を行っている。



【実現性ある計画の作成支援】

## ■担い手 ひだファーマーズミーティングの開催

11月10日に岐阜県青年農業士連絡協議会飛騨支部主催による「ひだファーマーズミーティング」が高山市で開催された。

ひだファーマーズミーティングは若手農家や新規就農者が地域や品目を超えた仲間づくり、情報交換をできる場として年に1度開催しており、今回で4回目となる。コロナ禍で開催も悩んだが、今年度は交流の機会がより少ないこともあり、対策を徹底した上での開催となった。

会場では新規就農者と青年農業士、農業普及課職員がグループを作り、テーマを決めずに話し合いが行われ、コロナ影響下での生産者の役割といった話題や、雇用を始める際の注意事項、地域のブランド化など話題は多岐にわたった。また、参加者からは他の品目の生産者との交流が視野を広めるので、ファーマーズミーティングのような交流の機会を今後も続けてほしいとの声を聞くことができた。

農業普及課は関係機関と連携しながら青年農業士の活動を支援し、担い手の育成につなげていく。



【農にまつわる deep で free な座談会】

## 売れるブランドづくり

### ■水稲 水稲種子の生産物審査を実施

来年度の水稲種子となる種籾について、農業普及課では、種子としての審査の一部項目（発芽率）の調査を、10月上旬より順次、実施している。発芽率以外の項目については、11月10日にJAひだの農産物検査員の協力のもと、籾殻を取り除き玄米にし、異品種混入が有無か、病虫害粒や雑草種子の混入割合が基準以下となっているか審査を実施した。

審査の結果、一部不合格となるものもあったが、次年度必要とする種子量は確保できる見込みとなっている。農業普及課では、次年度以降も良質な種子生産に向けた支援を継続する。



【サンプル種子から審査実施】

### ■大豆 大豆の収穫作業が始まる

飛騨市古川町では10月下旬から大豆の収穫が始まった。収穫に先立ち、大豆生産者からなる古川町大豆生産組合では10月22日に大豆収穫会議を開催し、今年の収穫作業について検討した。農業普及課では大豆の生育状況を解説し、収穫時期の判定法など適期収穫についての指導を行った。

今年は、7月の長雨により播種期が大きく分断されたことに加え、秋季が高温となったことから成熟が一斉ではなく、連続して収穫作業を行えない状況となっており、収穫作業が全て終わるのは12月上旬頃となる見込みである。



【大豆の収穫作業】

## ■果樹 飛騨りんごと洋なしを岐阜市の「おんさい広場」で対面販売

11月7日、「高山市果実組合」の主催により、JAぎふの農産物直売所「おんさい広場」3店舗（鷺山店、はぐり店、真正店）で果樹生産者と飛騨高山高校の生徒、JAひだ、全農岐阜、農業普及課職員が店頭に立ち、飛騨りんご9種類とラ・フランスの対面販売を行った。

コロナ禍にあり、客足等も心配されたが多くのお客さんが訪れ、各品種の特徴を聞きながら好みのりんごを選び、購入していた。

今年で70周年を迎えられる「高山市果実組合」は、今後更に多くの消費者に「高山市果実組合」を知ってもらい、永く愛される組合を目指している。

農業普及課では今後も、生産者や関係機関と連携しながら産地維持のため継続して支援していく。



【店頭での対面販売】

## ■夏秋トマト 農業者自ら栽培研究活動！本年度成果とりまとめを実施

丹生川蔬菜出荷組合トマト部会に設置されている栽培研究班（班員10名）は、農業者自らが栽培に関する研究課題を設定し、実践栽培において調査研究活動を行っている。

本年度はトマト新品種である「麗月」の果実品質向上に関する課題を中心として取り組み、去る10月29日、11月16日の2日間で成果のとりまとめにむけた検討を行った。結果として、丹生川地区で取り組んだ「定期的な土壌溶液の採取データ」を活用し、果実品質を高める肥培管理の傾向が明らかとなった。

農業普及課では、課題設定や研究状況の把握、データのとりまとめなど、研究班員の活動を支援している。



【熱心に検討する研班員ら】

## ■ほうれんそう スマート農業実証事業の取り組みを支援

11月16日、「夏ほうれんそう産地まるごとスマート農業化実証コンソーシアム」の事業打合せを行った。当事業では①遮光カーテンの自動制御、②ラジコン草刈機、③自動追従型運搬機、④アシストスーツ、⑤出荷予測の精度向上、⑥通信基地局の整備によるデータ蓄積の仕組みづくりの6課題に取り組んでいる。

当日は今年度の取りまとめに向けた経営データの整理、ラジコン草刈機の共同利用規約、モニタリングデータの活用などについて議論した。また、スマート農業推進センターから借用した4種のアシストスーツの体験も行った。

農業普及課は、進行管理役として実証を支援し、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。



【アシスト感を実感】

## ■ねぎ 品評会&目揃え会を開催、まもなく出荷始まる

飛騨一本太ねぎは高山市丹生川町を中心に栽培されており、丹生川飛騨ねぎ研究会は、毎年開催している品評会と目揃え会を、11月17日に行った。

品評会では、出品された10点について農業普及課、JAひだ、高山市丹生川支所の職員5名が軟白部の太さやそろい具合などを審査した。出品されたねぎは太さや長さ、外観が申し分ないものばかりだったため審査は難航したが、最優秀賞など3点を選出した。

目揃え会では実物を用いた出荷規格の確認や、出荷計画の確認が行われた。

研究会のねぎは注文販売でのみ取引される。11月25日から出荷開始予定で、注文数は例年並みの1500ケースを見込んでいる。



【立派なねぎが出揃う】

## ■ほうれんそう ほうれんそう合同プロジェクト土壌研修会

11月20日、清見荘川地区と高山南地区のほうれんそう部会の研究班が合同で土壌に関する研修会を開催した。

両地区の研究班では、近年合同で実証試験や研修会を開催しており、地域の枠を超えた交流をしている。

当日は、農業普及課から土壌物理性や土づくりについて、JAひだ営農指導員から今年度研究班で実施している肥料試験の経過及び各地域のコンポストの堆肥について紹介した。

参加者は積極的に質問しており、土づくりについての関心が高まっていることがうかがえた。

農業普及課では、引き続き営農指導員と協力して、各研究班の活動を支援する。



【土壌研修会】

## 住みよい農村づくり

### ■白川村 荒廃農地の再生を支援

11月5日に白川村にて、農地イキイキ再生週間の活動の一環として、荒廃農地の草刈り作業が実施された。当日は白川村農業委員会、村役場、農地整備課、農業普及課から計16人が参加した。

現場は荻町城跡展望台の下にある20aほどの土地で、作業前には人の背丈よりも高い草が生い茂り、低木が散在していた。

困難な作業が予想されたものの、参加者達は慣れた様子で刈払機を操り、手際よく草木を切っていた。刈払機を使えない者は鎌、なた、のこぎりを駆使し、機械が及ばない排水溝の際や太い木などに対応した。1時間以上に及ぶ作業の末、現場は見違えるほど手入れされ、展望台から臨む村の景観もより美しくなった。

農業普及課は今後も関係機関と連携し、耕作放棄地の拡大防止や農地の維持管理に取り組んでいく。



【背丈よりも高い草を刈る】